

令和 6 年度 荒砥地区まちづくり座談会における質問・要望事項と回答
令和 6 年 7 月 25 日(木) 午後 7:00～8:30 (荒砥地区コミュニティセンター)

町からのテーマ【第 6 次白鷹町総合計画後期基本計画の策定について】

《質疑応答》

Q. 今回 6 次ということで今までも総合計画が出されているが、新しい総合計画をつくる際にそれまでの総合計画に対する総括が見えない。白鷹町が出来てからのこの 70 年は一体どういうものであったかという認識が必要だと思う。町長に意見伺いたい。

また、荒廃農地が進んでいるがそのまま荒廃に任せるのか、農地を保全する施策を今後打ち出していくのか意見伺いたい。

A. (町長) 昭和 29 年 10 月 1 日に 1 町 5 カ村が合併した。1 町 5 カ村それぞれが経済的に行き届かなくなり合併した。昭和 45 年に過疎計画が出来たところから少しずつ前向きに進み、農業の話もされるようになり、減反も行われた。事業誘致をしていきたいと進んできたが特に水稻で米の値段が下がったことから経済的な疲弊が進んだ。農業は法人以外はほとんどなくなってしまっているのではないかと感じる。所得確保に向けて、転作奨励金への上乗せも検討する必要がある。白鷹町に限らず人口減少が起きている。人口を増やすよりも減らさない方法が必要。人口減少に対する取組を行ってきたが、都市部への一極集中を是正していくという国の課題であることも感じている。企業が募集をかけても応募者が少ない。特に福祉施設で外国からの実習生の受け入れが進んでいる。白鷹町では保育料無償化、18 歳まで医療費の無償化をしているが、給食費の無償化を進めている自治体もある。環境を整えながら少しずつ人口を減らさない努力をしていきたい。町の転出入の差はあまりないが、出生、死亡の差が大きく毎年人口が減っている。今のまま進めば農業がなくなってしまう。今の財政の中でどこまで出来るか皆さんといろいろな検討をさせていただきたい。

Q. 若い人、女性の感性を取り入れ、新しい時代に即して変えていく必要がある。障がいを持った人も安心して住みたいと思ってもらえる町にしていく必要がある。

今年の春、全国を旅している人から国道 287 号線の東根から荒砥まで続くこぶし並木を褒めてもらった。当たり前だと思っていたものが、いつの間にか全国に誇れるものになっている。観光振興や交流に繋げるのはどうか。下山まで繋げるのもいいのでは。苗木が必要な町で県に提供すればよい。Facebook にも配信すれば東洋一のこぶし街道になると思う。

A. (町長) こぶし街道は国道 287 号線を作る時に県から街路樹の相談があり、町の花であるこぶしになった。町の SNS は配信しているが特集のような配信はしていなかったので検討

させていただきたい。東洋一のこぶし街道といえるかは調べさせていただきたい。

Q. 基本計画の策定の中に安心安全な町づくりの項目がない。最近イノシシ、クマが増えて
いる。鳥獣被害に対する対応策をもっと真剣に考えていく必要があると思う。

A. (林政課長) 有害鳥獣の捕獲事業については猟友会の方々にお願いをしてやっている。猟友会は 40 名程しかおらず、罠の設置から見回り、捕獲後の処分をお願いしている。農業、人的被害の拡大を止めるために罠の設置数を増やすなどして対応を続けていきたい。林政課に相談いただければ電気柵設置の支援も行っている。設置後の管理については役場から指導していきたい。

A. (町長) 八幡様の杉の木が大きくなりすぎている。昔は杉を多く植えたが、大雨により崩れるのは杉が多い。町では伐採したらすぐ植えようと取り組んでいる。ぜひ地域の中で語り合っていたきたい。

Q. 菖蒲地区の避難所は荒砥コミセンだが、町の地域防災計画によると荒砥コミセンの収容人数は 150 名。収容人数は避難所としての正常な管理、運営、感染症対策が含まれたものである。菖蒲区全戸避難の場合、対象者 200 名が 150 名の施設に入るのはおかしい。

また、生命や財産を保護するため、車や農機具等も避難可能だが、避難させる場所がない。避難所の収容人数、車等の避難所、防災計画の見直しを希望する。

水害に関しては何時間も前に予測出来る。菖蒲区でも避難訓練の際にキキクルを活用している。キキクルを採用すれば数時間前に予測、指示が出来るので検討頂きたい。

A. (総務課長) 荒砥コミセンで 150 名が避難生活を送るのは難しいと思う。避難指示を出す時にどれくらいの収容が可能か、対応方法、避難所の指定については状況を踏まえて町長が判断をする。災害本部で情報把握、共有しながら避難所が満杯にならないよう、安全に身を移してもらえよう努力していきたい。

車の置き場所は指定出来るものなのかも含めて検討させていただきたい。

予測出来る災害は早めのお知らせをしながら、皆さんからも準備いただくような体制が取れればと思っている。

Q. 菖蒲区は自主避難を含めて全戸避難も経験し、常に危機意識が薄れることはない。
今年も荒砥コミセンを使って避難訓練を行い、訓練時点で車は約 40 台で駐車場が満杯。菖

蒲区の危機感を町の皆さんに共有していただき、いざという時にどこまでどうすれば動けるのかを一緒に考えていけるシステムに持って行ってほしい。

A. (町長) 地震は一瞬なので地震後の現場、避難先を出すのは大変。車で逃げられるのは水害しかないと考えている。今年は中学校、武道館の体育館にエアコンをつける。教育施設を含めた町の施設に避難出来る環境を増やしていくしかない。生活インフラを念頭に置きながら施設づくりをやっていくべき。ご理解いただきながら一緒に作らせていただければありがたい。

Q. 町のお金の基本となるふるさと納税の返礼品に関して、いろんな人のトマトを食べると品質にばらつきがある。糖度の統一はできないのか。企画課、農政課、副町長、大学の先生等を集めて投資的な農業政策をすれば特産品としての価値が上がると思う。意見伺いたい。

ふるさと納税特産品の募集について、ただ町報で募集するのではなく現場に行って掘り起こしするべき。町全体で掘り起こしすれば、税収が上がり農業の所得も上がる。町の政策は掘り下げたものがない。意見伺いたい。また、紅花はどう進めるのか。

A. (町長) ふるさと納税制度そのものに疑問を持っているところもある。ふるさと納税の返礼品として花菱縫製のスーツ仕立券が一番人気があり、1億円くらいの納税があった。町を出た方に限らず、インターネットを見ておいしいものを追いかけて納税している方が多い。返礼品の味に関しては行政が関わるものではないと思う。生産者の方達が話し合いをしながらやっていただければと思う。町で支援できるところは支援しながらやっていきたい。

A. (副町長) 情報発信の仕方が下手だということを感じた。賛同いただける方の畑を借りて修景用の紅花を作ってきた。紅花作りは高齢者の方が中心のため、後継者の方をどうしていくかが課題。紅花は連作障害が必ず出ると言われているが、土の改良をしたところは効果を感じている。土の改良事業も推進していきたい。